

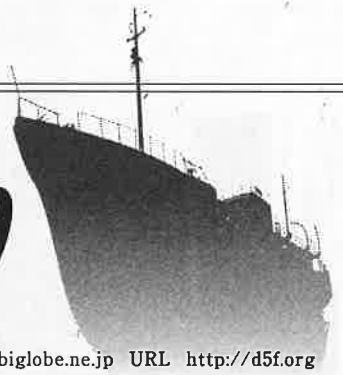
2010.11.01
No.360

(11・12月合併号)

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail : fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

福竜丸だより



写真左：焼津平和賞受賞記念会にて、
「ズン」に開催中の特別展「世界遺産
ピキニ環礁」のバネルに熱心に見入る生
徒たち。



核なき世界へ

ともに力を合わせましょう

焼津平和賞
受賞記念会開く

展示館の発展を誓いあいまし
た(関連2、3面)。

第五福竜丸平和協会は、一〇月一六日、焼津平和賞受賞の記念会を学士会館にて開催、各界から一〇〇名を超える方がたが出席しました。

特別展「イケナイ世界遺産ピキニ環礁」はじまる

会は、記念の演奏で開幕。毎年久保山忌(九月二三日)に展示館で演奏してきた松島よしおさんと音楽仲間による、平和をねがい第五福竜丸の航海をともにとの願いが込められた曲が披露されました。

第五福竜丸平和協会は、ピキニ環礁が世界遺産に登録されたことを受けて、同環礁の歴史と人々の苦悩、核実験による被害の現状などを伝える特別展を開いています。

主催者を代表し川崎昭一郎代表理事が参加者への御礼をこめて挨拶、焼津市の清水泰市長からお祝いの言葉がありました。つづいて東京の被爆者の会(東友会)の飯田マリ子会長から乾杯のご発声があり、賑やかな懇談の輪がいくつもできました。

全体の企画と構成は、協会専門委員の豊崎博光さんに委嘱し、岩垂弘さん(評議員、ジャーナリスト)が監修しました。

今回の企画には、社団法人日本ユネスコ協会連盟、駐日マニラ諸島共和国大使館、東京都ユネスコ連絡協議会が後援を寄せています。多くのみなさんにご覧いただき、核開発がもたらした惨禍、ピキニの人びとの苦悩を知るとともに、マニラ諸島の核被害、世界の核実験の問題へと視野をひろげていただければと思います。

会の後半では、参加者や団体の紹介、平和賞選考委員長の佐藤博明さんをはじめ数名からご挨拶を頂き、第五福竜丸と

(4～6面に関連)

記念会でのご挨拶から——(要旨)

第五福竜丸平和協会

代表理事 川崎昭一郎

本年新しく創設された焼津

平和賞の第一回目を受賞した
ことにより、第五福竜丸事件
が改めて社会の注目を浴びる
ことになりました。最近では
静岡の学校からの見学者が増
えてきており、本日も幅広い
分野の方々のご参加、大変嬉
しく存じます。

今日、第五福竜丸展示館と
いう拠点を確立して核兵器の
ない未来に向けての情報を発
信し、普及広報を間断なく行
えることは、何十年にも及ぶ
実に多くの人々の献身と英知

の賜物です。

本年は、前年オバマ米大統
領のプラハ演説に引き続き、
核不拡散条約再検討会議で五
年前よりも積極的な方向が打
ち出されたこと、アメリカ政
府の高官によるヒロシマ・ナ
ガサキ被爆地初訪問など、新
しい動きが見られます。

それだけに、オバマ政権下

焼津市

市長

清水 泰

公益財団法人第五福竜丸平
和協会の皆様、「第一回焼津



で初の未臨界核実験が実施さ
れたことは、核兵器廃絶への
努力の手を決して緩めてはな
らないことを示していると思
います。

私たちは、第五福竜丸展示
館の存在と当法人の活動が、
新しい運動の芽生えに少しで
も役立ち力になることができ
ればと願い、また皆様を通じ
て一人でも多くの方に展示館
におこしいただき、どしどし
ご意見・ご提案やご助言をお
寄せ下さることを心より願っ
ております。ありがとうございます。

平和賞」受賞おめでとうござ
います。焼津平和賞は、第五
福竜丸の母港をもつ焼津市と
して、その悲劇を後世に語り
継ぎ、核兵器廃絶と世界平和
の実現のための運動を熱心
に行う国内外の個人・団体を表
彰するものとして、昨年一〇
月に創設しました。

二六の個人・団体の推薦が
あり二回の選考委員会を経
て、「第五福竜丸の被災の経
験を世界に伝える媒体とし

て、ほかの候補と比べて圧倒
的な説得力と臨場感がある」
として、第五福竜丸展示館を
管理運営する第五福竜丸平和
協会に、平和賞を贈ることと
なりました。

今年には、核廃絶に向け新し
い一ページを開いたと思いま
す。私も参加しましたニュー
ヨークでのNPT再検討会議
の最終文書が採択され、初め
て核兵器禁止条約に言及しま
した。

パン・ギムン国連事務総長
の初の広島・平和記念式典参
加、アメリカ・ルース駐日大

東京都原爆被害者団体協議会

会長 飯田マリ子

使の参列など核に関連し歴史
的な出来事が続きました。

「ビキニ環礁」の世界文化
遺産への登録も意義あること
と思えます。「ビキニ環礁」
とその核の被害を受けた「第
五福竜丸」が保存されている
「第五福竜丸展示館」の二つ
が今年、注目を浴びたことは
何か因縁を感じます。

この悲惨な経験を繰り返し
てはなりません。つぎの世代
に伝えなければなりません。
一日も早い「核のない世界」
の実現のために、共に力をあ
わせてまいりましょう。

受賞本当におめでとうござ
います。六五年前の原爆投下
による被害は、国民的には知
られることから隠されました。

一九五四年のビキニ事件・第
五福竜丸の被災により、原水
爆禁止の運動となり全国に広
がりました。五五年に原水爆
禁止世界大会が開かれ、被爆
者の大きな団結、五六年に日
本被団協の結成へと結実しま
した。その二年後に東京の被

爆者の会が結成されました。
第五福竜丸の被災は大きな出
発点を作りだしたのです。

いま被爆者も高齢化し、全
国で二二十万人余になつていま
す。しかし黙っているわけに
はいきません。昨日も未臨界
核実験への抗議文を被爆者代
表がアメリカ大使館に届けて
まいりました。
みなさまとともにすすんで
参りたいと思います。

記念会 懇談のなかから

記念会には焼津など静岡県下をはじめ、協会と展示館を応援くださる個人・団体、賛助会員など百名余の方々が出席されました。参加者をご紹介しながら何人かの方からご挨拶を頂戴しました。

焼津平和賞の選考委員長で元静岡大学長の佐藤博明さんは、「七人の選考委員は、第一回の焼津平和賞をその趣旨に相応しい団体・個人に贈ることを心がけ、まさに一致し



た評価として、第五福竜丸展示館と協会の活動がビキニ事件と第五福竜丸の被災を世界に広げる圧倒的な説得力を持っていると考えました。これからもこの心を引き継いで核兵器のない世界実現のための発信拠点になっていただきたいと期待します」と述べました。会には選考委員の加藤一夫・静岡福祉大学前学長も参加しました。

*

第五福竜丸の保存に関連して、廃船処分される直前、品川岸壁の「はやぶさ丸」を都港湾分会のニュースで報じた矢野政昭さん、保存の取組みに最初から関わられた江東区の元教師青木佳子さん、保存運動を全国的に担われた日本原水協、原水禁国民会議の代表も紹介されました。展示館での様ざまな催しでは、四月の「お花見平和のつどい」の地婦連や主婦連合会、青年団、九月二三日の久保山忌の「平和を語る集い」や句会の方がた、展示館前からスタートする反核マラソンを主催する新日本スポーツ連盟が参加しました。



*

第五福竜丸の被災から二ヵ月後、ビキニ海域の放射能調査に政府が派遣した観測船・俊鶴丸に乗り組まれた岡野眞治さんは、「核実験が行われている海域に行く船の乗組員や研究者をいかに放射線から守るかということが役割で、そのため放射線や核実験に関する勉強を重ねた。アメリカでも核開発の現場にいた科学者が被ばくの影響で随分亡くなっており、核をどのようになくしていけるか真剣に追究しなければいけません」と語りました。放射能の測定を今もつづける気象研究所の主任研究官青

*

山道夫さんは、「地球科学研究部では海に入った人工放射能がどのように動いているかという研究をしている。最近の知見として、五〇、六〇年代海洋の表面にたくさん出された人工放射能が海の深いところに入っていたと考えられてきたが、最近日本の近いところに戻り、近海のセシウム137は下がらずにむしろ増えてきている」と報告しました。

ビキニ環礁の核被害を取材し伝えたジャーナリストの前田哲男さん、豊崎博光さんも紹介され、前田さんは、「一九七四年八月に初めてビキニ環礁に入った。それは数年前に安全宣言がだされて住民が少し帰ってきたときだった。上陸して水を飲み、ヤシを食べましたが、その後ビキニは再開鎖された。今回の世界遺産は、原爆ドームと同様（負の遺産）であるが、第五福竜丸のマイナスの記憶と負の遺産のマイナスとが相乗して展示館という語り継ぐ場が生まれたとおもう。展示館から想像力を働かせ、私たちの行くべき道を考えたいと願

ます」（5面に寄稿文）と語りました。つづいて日本被団協事務局長の田中熙巳さんが、病床の久保山愛吉さんに東大生協の同僚とともに励ましの書き置きを贈ったエピソードを語りました。

博物館の関係者として、ピースおおさかの倉田清館長から「昨年、ピースおおさかの第五福竜丸の特別展を開き、大阪の市民の記憶を思い起こすことができた。三万人の来館者があり、改めてこの事件の大きさを訴えられたと思います」との話がありました。原爆の図・丸木美術館の鶴田雅英常務理事は、来春ベシヤーンと第五福竜丸の展覧会を開催することなどを紹介しました。

最後に、司会を務めた坂野直子協会理事は、多くの方々への支援で協会と展示館の事業が進められていることに改めて感謝するとともに、社会教育、平和学習の施設としての展示館の活用や広がりにも一層力を入れていきたいと述べて記念会を閉じました。

特別展

「世界遺産 ビキニ環礁」展示紹介



「環礁の底に沈んだ船やプラボー実験の巨大なクレーターなど、核実験の証拠を保持している。繰り返された核実験はビキニ環礁の地質、自然、人びとの健康に重大な影響をもたらせており、平和と地上の楽園という矛盾したイメージにもかかわらず、核時代の夜明を象徴している―ユネスコ（国連教育科学文化機関）は、本年の世界遺産登録を発表したなかで、ビキニ環礁を〈文化遺産〉に選んだ理由をこう述べ、さらに「将来の記憶にとどめなければなら

ない」と報じられました。

今回の特別展の展示は、一枚の写真・解説パネルを中心に、現物資料四ケース（三五点）、写真四四点と展覧会に寄せられたイラストレーター黒田征太郎さんの「Bikini Memo」作品から構成されています。

特別展タイトル「イケナイ世界遺産」とは、黒田征太郎さんと作家・野坂昭如さんの戦争童話集「忘れてはイケナイ物語り」から名づけられ、「忘れてはイケナイ」「繰り返してはイケナイ」「誰も生きてイケナイ」「誰も行けない」との思いが込められています。

おもな構成

写真パネル（プラボークレータ―）ほか1954年三月一日の水爆実験プラボーはナム島の沖合で爆発。サンゴ礁が砕けて直径二千メートルにわたりにえぐられた深い海の色を見ることが出来ます。

解説パネル「四〇〇」？

ビキニ環礁はどこにある…。その大きさは、日本との歴史的關係、どうやっていけるのか？ などビキニ環礁Q&Aの説明パネル。

解説パネル「ビキニ環礁が核実験場に！」

「人がいないのではなく少なかったから」〈突然アメリカの軍人がやってきた〉〈流浪の民となった人びと〉一九四五年一月の核実験場選定から、四六年二月のある日曜日、米軍人がやってきて核実験場となったことを告げます。その年の七月の最初の核実験からビキニで二三回（隣のエニウエトク環礁での実験を合わせて六七回）の爆発により環礁は汚染され、住民はいまも帰島することは叶いません。

解説パネル「ビキニ島住民の苦難」

〈食べ物が少ない無人島へ移る〉〈ビキニに戻り深刻な被ばく〉〈住むことのできない場所〉ビキニの住民が移り住んだロングリック環礁もその後移り住んだキリ島でも食料不足で人びとは餓えに苦しみました。実験が終了して一〇年後の

一九六八年、ビキニ島の安全宣言がだされ、帰島する人が出始めます。しかし七〇年代半ばには住民の体内から放射能が検出され、七八年八月、帰島した住民一四五人は島を退去させられました。

解説パネル「第五福竜丸の被ばくと原水爆反対の声」

〈食卓をおそった水爆実験〉〈原水爆禁止の運動ひろがる〉第五福竜丸の被ばくが明らかになると、政府はマグロの検査を始めました。梅雨期には各地に放射能を含む雨が降り、核実験は台所から食卓まで市民のくらしを脅かしました。

水産業者や主婦の間から水爆実験反対の声があがり、各地で署名運動や自治体決議が広がっていきました。久保山無線長の死去により原水爆禁止の声は一段と高まり、翌五五年八月には原水爆禁止世界大会の開催、七月に「ラッセル・アイシユタイン宣言」の発表など、こんにちに続く核兵器廃絶の運動の契機となりました。

解説パネル「マーシャル諸島の核実験被害」

〈3つの島がなくなった〉〈プラボー水爆は広島原爆の一千

倍〉〈伝統、文化、くらしを奪われた〉

米国の核実験によりマーシャル諸島全域が放射能で汚染されました。ビキニでは二三の島すべてにわたり住むことは許されません。エニウエトク環礁では四〇島のうち南部の三島にしか住むことは許されません。

核実験により故郷以外での生活を余儀なくされた人びとは、育んできた島の伝統や文化、生きる基盤そのものを壊されてしまいました。実験終了から半世紀たついまもその被害は深刻です。

「ビキニの人びとの声！」のパネルで、エモシ・レイイクスさん、ローリー・ケシブギさん、ペロ・ジョエルさん、ジユクワ・ジャケオさん、トマキ・ジュタさん、キーロン・ブエノさん、アンロー・ジャケオさんら七人の訴えを伝えます。

資料として核実験史年表、現物展示としてビキニに取材したジャーナリスト提供の資料、民芸品、出版物などを展示しています。

会期は二〇一一年三月二〇日までです。

福竜丸の向こう側 “ビキニ世界遺産 指定”に寄せて

前田 哲 男

はじめてビキニ環礁の海と島影を見たのは、一九七四年七月二四日だった。「ヤップ・アイランダー」という名の二〇〇トンほどのコブラ集荷船でマジロを出航してから一週間後だった。取材メモに「1330（午後一時半）ビキニ島望見。他の島と変わらぬ風景。しかし、木はまばら、数がわかるほど。島に近づくにつれて海の色が変わる」と記している。

じつさい目の前に、この海と島に二三回（当時の米原子力委発表）ものキノコ雲が立ち昇った、とは信じられないまばゆい珊瑚礁と青から緑へ

さまざまな色合いに織りなす穏やかなラグーン（礁湖）の海面がひろがっていた。船中で読んだ前年の国連調査団報告——そのころビキニ——マーシャル諸島——ミクロネシアは「アメリカを唯一の施政国とする国連信託統治領」だった——に、将来の計画として「ビキニの世界的な名声を歴史的な場所や観光地として売り出す」アイディアが提案されていたが、それも「核実験場」のイメージより「水着のビキニ」から連想されたのだろう。

しかし、上陸して見た島内の光景は荒涼たるものだった。いたるところに観測用施設の残骸やコンクリートのかたまりが放置されていた。移植された椰子もじゅうぶんに育っていないかった。実験停止から一〇年後の一九六八年、米大統領声明による「ビキニ安全宣言」がなされ、「住民再移住計画」が推進されたのだが（それで私たちも入島できた）、このときまでに帰島していたのは二家族一四人にすぎなかった。六〇歳のイボン・オムリックさんは「ココナツクラブ（ヤシガニ）は

毒があるから食べるのを禁止されている」と言った。その家族も、七九年の「ビキニ再閉鎖」によって、つかの間の帰郷を打ち切られてしまう。帰島者の体内から健康に危険なレベルの残留放射能が検出され、「毒」はヤシガニだけでなく、いぜん環礁内の生態系全体を満たしていると思われるのだ。

*

わたし（と写真家の島田興生）は、ビキニ環礁のつぎに訪れたロンゲラップ環礁で住民の被災状況をくわしく聞くことができた。一九五四年三月一日、ビキニ島の鉄塔上で爆発した「ブラボー爆弾」は、おびただしい珊瑚礁の破片を第五福竜丸の甲板に降らせ、たばかりでなく、「熱帯の雪」となってロンゲラップ島に降り多く積もったのだった。「私たちは置き去りにされたネズミでした」と村長のジョン・アンジャインが言った。島人は口々に、その朝、突如二〇〇キロも離れたビキニ方向の天空に太陽ともみまごう火球が昇り、数分後、つむじ風が島を通り抜け、一日じゅ

う死の灰が体にまとわりついた体験を語ってくれた。ラグーンぞいの共同墓地に米政府が「人類の水爆死第一号」と認定したジョンの息子、一九歳のレコジ・アンジャインの墓があった。島の人は、福竜丸の被災や久保山さんの死を知らされていなかった。

私たちが会った人のほとんどは、いま、もういない。ロンゲラップも無人の島になった。

*

このたび、ビキニ環礁がユネスコの世界遺産（負の遺産）に指定されたとのニュースを聞いて、すぐに浮かんだのは、以上のような目と耳の記憶である。

では微動もしていない。その点で、ビキニ環礁は広島やアウシユビツツのような世界遺産と意味がちがう。遺産というより、まだ「現場」なのである。

*

人はまず「第五福竜丸展示館」を訪ねるべきだろう。核の時代が犯した悲惨なできごとを思い出し、悲劇を二度と起こさない戒めとするため、福竜丸の船先から、想像力をもって、福竜丸の向こう側を見ることをお勧めしたい。そうすることで、ビキニ・福竜丸・ロンゲラップの悲劇が追体験できるはずだ。そういえば、福竜丸の乗組員もまた、だれひとりビキニ環礁を見ていないのである。おなじ年に、第五福竜丸平和協会が「第一回焼津平和賞」に選ばれたのも、まことに時宜を得たことであった。（ジャーナリスト／協会専門委員）



想に環礁にビキニ いを寄せて

多田 智恵子

核実験によってビキニ環礁から島民が移住したキリ島。そこに私が青年海外協力隊員として赴任したのは、9・11同時多発テロの起こった前日だった。あれから早九年。この夏に飛び込んできたビキニ環礁世界遺産登録のニュースは、私にとって大変感慨深いものだった。

キリ島の住民の大多数はビキニ環礁を見たことすらない二世・三世たちだったが、わずかとなったビキニ生まれのお年寄りが、「ビキニは美しいんだ。魚がいっぱい獲れるんだ」と誇らし気に語っていたのを覚えている。キリ島にいて、ビキニ生まれのお年寄りが亡くなり島の墓地に埋葬されることほど悲しいことは

なかった。

実は、日本へ帰国する直前、私はビキニ環礁でダイビングをする機会を得た。ビキニを訪れたことのない住民が多いのに、ましてや外国人の私がダイビングだなんて…という申し訳なさを覚えつつ、実際にビキニ環礁を目にし、ビキニ環礁を切望するお年寄りの気持ちに理解できた。ビキニ環礁は本当に美しい環礁だった。エメラルド色に輝くラグーン（礁湖）と真っ白な砂浜、外洋側に伸びる遠浅の砂浜、サンゴの間を泳ぐたくさんの魚たち。ただ同時に、核実験時に使われたらしきコンクリートの小屋、フェンスで囲まれた制限区域、規則正しく並ぶ背の低いヤシの木など、異様なものも目についた。

ラグーンの中に潜ると、実際に沈められたいくつもの艦船を見ることができた。巨大な軍艦「サラトガ」、日本から来た「長門」。穏やかな海面だけを見ていると、まるで何ごともなかったかのようだが、沈んでいる船は半世紀前にそこで起こった事実を確かに示していた。

いつの日かビキニ環礁で句会を

新俳句人連盟副会長 田中千恵子

福竜丸の船腹に唇をよせ「第一回焼津平和賞受賞おめでとう」とささやくと、ふふっと笑い「あなた方もね、三〇周年おめでとう」とささやき返してくれた。

福竜丸と共に歩いてきた「久保山忌句会」が三〇周年を迎え、記念の冊子を作り、展示館では短冊展を行っていた。その報告と献花を久保山愛吉さんの遺言碑にしたいのだが、展示館の外は台風かと思うほどの激しい風雨であつた。小雨時に献花を済ませ、句会場へ向かう道すがら、

翻って、キリ島で米国からの核実験の補償金を頼りに近代的な生活を送る島民たちは、私には不健康で不幸せそうに見えた。私は彼らを見ていて、そろそろビキニに帰るべきなのではないかと思うこともあつた。けれど、もしも安全が確認されて彼らが故郷に帰ることができたとして

三〇回を数えた久保山忌句会のあれこれが走馬灯のように行過ぎてゆく。なかでも静岡からかけつけ「久保山忌俳句は書けばいいというのではなく、その質においてもすぐれてなくては」と檄をとばしてくれた漆畑利男さんの言葉が耳にこだまする。

海が生臭い久保山愛吉たちがいる 利男
福竜丸が被爆したビキニ環

第三〇回久保山忌句会船員証作品
碑ざくろ喝采世界遺産に被爆の海

湾の樹々声あげ久保山忌の豪雨

田中千恵子
石川 貞夫

も、彼らがそこで現実的に暮らしていけるとも思えなかつた。離島で暮らすために必要な伝統的な技術はもうすっかり失われていたから。彼らにとつてどうすることが望ましいのだろう。マリーシャルにいたの間、私はずっと考え続けてきた。でも、答えは出なかつた。決めるのは彼らだ、とい

礁が、今年八月世界遺産に登録された。これは人類にとつて負の遺産ではあるが、世界中の人々がふたたびビキニの惨禍を注視する。ビキニ環礁は広島・長崎と共に「核なき世界」を実現するための聖地とも言える場所になったのである。

今年も福竜丸にも久保山忌句会にもおめでとうが重なり、私は楽しい夢をもつた。いつの日か、久保山忌句会の仲間たちとでビキニ環礁にゆき、小さな島のヤシの木陰で句会を開くのだ。その時は福竜丸、あなたも一緒にね。

うこと以外には。

果たして、今回の世界遺産登録が故郷に帰れない彼らにどのような変化をもたらすのだろうか。彼らはその意味をどれくらい理解しているのだろうか。世界遺産登録が彼らの自立を後押しすることにつながることを祈るばかりだ。

(仙台在住・小学校教員)



船は幾度も水没しかけた

前号は畑中政春さんの「国民世論を再結集する」保存運動への期待の言葉を紹介しましたが、同じパンフレットに代表委員の中野好夫さんも文章を寄せています。

「最近では『わだつみ像』すら無意味なものとして、倒し、破壊する若者たちも現れる時

連載⑤

晴れた日に 雨の日に

—第五福竜丸とともに—

山村茂雄

代ですから、福竜丸もまたたんなる物として、保存などに値しないと考える人たちもいるかもしれません。だが、わたしは決してそうだとは考えません。福竜丸は物であって、しかも物ではありません。問題はあの古ぼけた一隻の船が伝えてくれている大きな歴史的意義、人類の命運にさえかわる大きな意味なのです。次いで、こう書かれます。

「あの不幸な分裂を重ねてきた原水協系、原水禁系の人びとがたとえまだ十分とはいかないまでも、はじめて一座して平和に同じ問題を話し合えることになりました。小さなことだが、数年来画期的なことです。——保存運動そのものとともに、なんとかこのキッカケを発展させ、せめて緩い連帯なりと、目的を同じくする諸組織の間につくりあげていきたいと、これも忘れていただきたくないわたしの念願です」。

*

第五福竜丸保存委員会のなかで、原水爆禁止運動の統一問題が直に論議されたことはありませんでした。この問題

について、展示館開館一年後に刊行した広田重道著『第五福竜丸』に書かれていることを紹介してみましよう。

第五福竜丸の永久保存によって原水爆禁止運動に寄与したいという方向に、二つの流れがあったと次のように述べています。「そのひとつは、第五福竜丸の保存によって原水爆禁止運動に新たな局面を切り開こうという流れ、もう一つは、保存運動によって長年の懸案である原水爆禁止運動の分裂の克服と統一を達成しようとする流れであった」。かぶせるように、「前者の新たな局面を開くということのなかには、統一問題も考慮されてはいるのだが、それ自体を目的とせず、むしろ運動の高揚の帰結として考えられていた」、広田さんの視点が推しはかられる記述です。

保存委員会は代表委員がそうであるように、役員・常任委員・世話人も肩書きを外しての選任でしたが、人選には団体のバランスが配慮されていました。

*

保存委員会は結成後、都と

の連絡を強め、船体名を「第五福竜丸」に戻し(刻名式)、世論への働きかけを進めました。しかし、夢の島の埋立て、護岸工事が遅延し、それに伴い市民募金も勢いをそがれ、当初目標を大幅に下回り、また委員会の足並みにも不揃いが見られるようになりました。

委員会は意見の違いの調整に努め、運動状況の転換を図りました。七〇年九月一八日、代表委員連名の「広島・長崎被爆25周年、ビキニ被災16周年にあたり、第五福竜丸永久保存につき、国民のみなさまに訴えます」というアピールを発表します。

アピールの前段は保存委員会の活動の経過と今後の具体的保存計画の概要を述べ、支援を呼びかけたものでした。アピールはその後段で、原水爆禁止運動の「残念な分裂状態」にふれ、「できるならばこれが統一ということはおそらく心ある国民のすべての願いだと確信します」「性急に統一が実現するなどという甘い幻想を抱いてはいません」「しかしもしかりに、わたしたち保存委員会が、福

竜丸保存というこの超党派的国民課題を媒体にして、本来あるべき原水爆禁止運動の姿へと、ほんのささやかなきつかけ、小さな積み石の一つにでもなることができれば、これほど望外な幸せはありません」と述べたのでした。

文中の「媒体」という文言が問題となりました。議論は保存委員会の「配慮あるバランス」をもくずしかねないほどに激しく、委員会「開店休業」(広田)の状況を招くのです。

このことを『ビキニ水爆被災資料集』収録の付録「第五福竜丸保存運動」は、こう記載しています。

「その結果、同年九月二三日の故久保山愛吉氏追悼会などの諸行事が終わるとともに、保存運動は一種の無風状態に入るにいたった」のでした。

「この項つづく」

(第五福竜丸平和協会顧問)

(広田重道著『第五福竜丸』1981年刊。『ビキニ水爆被災資料集』第五福竜丸平和協会編・1976年刊)。

雨のなかでの久保山忌



例年にない大荒れの天気にもかかわらず、今年も9月23日、久保山愛吉さんの命日に、さまざまな取り組みが催され多勢の方が来館されました。

ヒガンバナやタマスダレが咲く久保山記念碑前では、吟行を終えた「久保山忌句会」のメンバーが献花を行い、川崎昭一郎代表理事が挨拶しました。

東京原水協などによる「第五福竜丸のつどい」は、館内見学の後、久保山記念碑に献花し、公園内の東京スポーツ文化館で学習会を行いました。会では詩人のアーサー・ビナードさん、元福竜丸乗組員の大石又七さんのお話のほか、安田和也事務局長が挨拶しました。

18回目を迎える「平和を語る第五福竜丸の集い」（実行委員会主催）では、紙芝居、一人語り、音楽など多彩な発表があり、第五福竜丸ボランティアの会も、特別展に因み『原爆の子』をモチーフにした、いわさきちひろ『わたしがちいさかったときに』から原爆詩と、福竜丸に寄せられたヒバクシャのメッセージを朗読しました。

また、毎日写真コンクール入選の写真パネルが展示されました。

焼津平和賞受賞記念バンダナ 〈調和の海〉ができました！

第一回焼津平和賞の受賞を記念して、新しいグッズが生まれました。

紫紺の地に第五福竜丸と生きとし生けるものが、愉しげに踊っているようすが



染められています。

林光さんによる「ラッキードラゴン・クインテット」第三楽章から名前をいただき〈調和の海〉と名付けました。デザイン事務所「うぶすな」を主宰する上浦智宏さんのデザインです。上浦さんはこれまでも、特別展のアートディレクションを手がけており、核なき世界をめざして福竜丸が航海する海や宇宙をイメージしたとのことでした。

片岡 脩 平和ポスター展おわる

5月より開催されていた特別展「〈原爆の子〉片岡脩 平和ポスター展」が終了しました。137日の会期中たくさんの方が作品に触れメッセージを寄せました。

片岡さんの同窓生や教え子、友人の来館も多く、寄せ書きボードには「先輩の思いを生かし、核なき世界をつくります」「はるばる広島からポスターに会いにきました」との書き込みもあります。また「世界と子どもたちのために平和な世界を」「核なき世界へ行動しよう」など英語やハングルのメッセージも書かれています。



〈寄贈資料紹介〉 ありがとうございました

◇長田真紀さんより、ロシア語版『原爆の子』が寄贈されました。『原爆の子』はこれまでエスペラント語、ギリシャ語、中国語、スウェーデン語、ベトナム語、インドネシア語版などが出版されており、これで17カ国語で翻訳出版されたこととなります。

◇前川立夫さんより、ビキニ事件当時尼崎市塚口中央市場に貼られたポスターをご寄贈いただきました。このポスターには、大阪市衛生局長、大阪市中央卸売市場長名で「水爆マグロは当地では販売させませんでした。当店で売られている魚類はみな心配ありません」と書かれています。

第五福竜丸平和協会の 顧問・役員の懇談会開く

協会が公益財団法人となって初めての顧問・評議員・理事・監事による懇談会が、10月16日午前11時半より記念会に先立っておこなわれました。

会には顧問の杉重彦さん、柴田徳衛さん、山村茂雄さんをはじめ14人が出席。坂野理事の進行で、川崎代表理事の挨拶、川口理事から展示館の来館者の概況、企画展や催しなどについて、安田事務局長から、今年後半の特別展、3・1のつどいなどの企画について、日塔評議員より船体の保存の現況などについて報告がおこなわれました。

また新しく監事に就任した浦野広明さん（税理士・立正大学教授）が就任の挨拶をされました。

顧問からは、船体が夢の島に放置されていた頃の話や展示館の設計者として現在の建物の状況など詳しく見てみたいなどの話ができました。

9月より事務局に大友里恵さんが加わりました。どうぞよろしくお願します。